

## フトコロのある家

設計:水石浩太建築設計室

### 緩やかな連続感を生み出す

水石浩太 | Kota Mizuishi

3つに分筆された土地の最奥に計画された住宅である。東西方向は隣家が迫ることが予想されたため、南北方向に風と視線の抜ける住宅を目指した。住まい手は夫婦と小さな女の子2人、2匹の犬、3匹の猫である。比較的多かったが、そのあふれ具合を見ると収納にものをしまうというよりは、「しまわなくても気にならない」くらいが丁度良いのではないかと考えた。

建物の長辺方向は東西の壁面を閉鎖的にして、短辺方向は両端で600mmという最低限の耐力小壁を連続させることで開放的にしている。この小壁で生じる“フトコロ”部分は、カーテンで閉じたり開いたりしながら、収納や作業台、机といった家具になったり、ペットの居場所や部屋の延長になったりと、さまざまにその役割を変える。住まい手の生活がにじみ出てくるような、厚みを持った壁ともいえるだろう。

建物全体は、中央に階段と吹抜けを配置して回遊動線を確保し、斜線制限に合わせて2階北側の床を下げることで、家全体がスキップフロア状につながる構成である。階段や吹抜けには、顔を出せるようなさまざまな隙間や開口を設けた。南側には玄関を兼ねた大きな土間をテラスと一体的につくって全面

開口にすると同時に、室内と同じ柱を軒下まで立てて内外の連続感をつくり出す。またテラス土間を木ルーバーで囲って犬猫の逃亡を防ぎつつ、外からの視線と日射を調整しながら土間全体を内部に引き込んでいる。大開口の窓を開けることで内外を一体として、ペットたちも交流できる場所になっている。“トイレ倉庫”と名付けた2階の通り抜けできる場所には、“フトコロ”部分に一体型便器「サティス」を置き、隣に机にも物置きにもなるような作業台を設置した。普段は2つの引込み戸を全開にすることによって、便器の存在が従来とは少し違ったものになるのではないかと考えている。

また、この住宅にはあらゆるところにカーテンレールを設置している。カーテンはその性質故に緩やかなつながりや変化を許容するには有効で、ものを隠すカーテン(収納)、空間を仕切るカーテン(部屋)、外部環境とのバッファゾーンをつくるカーテン(環境調整)という具合に、使われ方として何とおりかに分類できる。

カーテンが生活を透かしながら、ものやペットと共存できる、文字どおり“フトコロの深い”家になったのではないかと考えている。



みずいし・こうた——建築家/1973年生まれ。1997年、横浜国立大学工学部建設学科建築学コース卒業。2000年、東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。2000-03年、袴田喜夫建築設計室。2003年、TKO-M.architects共同設立。2009年、水石浩太建築設計室設立。  
主な作品:越谷の住宅[2003]、津の住宅[2004]、小平の住宅[2008]、堀ノ内の住宅[2011]など。

1——リビング・ダイニング | 2——畳スペースから土間方向を見る | 3——室2 | 4——玄関土間 | 5——トイレ倉庫 | 6——南面全景

